道綽『安楽集』「勧信求往」の構造について

福井順忍

序言

『安楽集』冒頭には「勧信求往」と掲げられ、これは道綽教学の主題を表すものだと考えられる。筆者は先にこの語の意味する内容について考察し、浄土教未信の人々に浄土教への信を起こさせ、往生を求めさせることを指しているという知見を得た[1]。ではその求めさせる往生の過程を、道綽はどのように考えていたのであろうか。これを『安楽集』内で何らかの形で示しているはずであるが、本論では「勧信求往」を窺う一視点として、この問題を明かにする。

翻って従来の研究状況を窺うに、道綽の往生理解は『安楽集』の構成が雑然で未整理との評価を受けることもあり[2]、念仏[3]や仏身仏土論[4]が注目され、往生の過程に関しては今まであまり言及されてこなかった[5]。確かに『安楽集』には念仏三昧と観仏三昧がほぼ同義語のように使われている箇所もあり、「念仏」という語が何を意味するかを確定させていく作業は重要な行程である。仏身仏土論についても、道綽が第二大門と第六大門で明かす内容が一見異なっているようにも見え、研究する意義は大きい。しかしながら往生の過程は念仏や仏身仏土論のみで語られるも

のではなく、実際に道綽自身、その他の要素も含めて往生を語っているというのが筆者の見方である。

かかる問題意識に基づき、本論では『安楽集』において往生体系がいかに明かされているかを窺い、その意義を考察する。『安楽集』の内容が複雑に構成されていることは否定できないが、雑多な構成の中にも道綽の往生理解が示されている箇所があると考える。

一、道綽教学における往生体系と『安楽集』第一大門の構成

先にも触れたが、往生の過程について言及されてこなかった理由の一つは、『安楽集』自体の体裁にあると考えられる。『安楽集』は、一つの大門に複数の内容が説かれていることが多く[6]、研究対象を任意の項目に絞って追っていくという研究方法[7]になりがちだったのである。これは研究方法として有効であり、内容を詳しく検討する際にはこの方法に依る必要がある一方、『安楽集』の構成意図を見逃す危険性があることを考慮しなければならない。

さて以上のような点を踏まえ、ここでは道綽の想定する往生の過程を、第一大門の構成から考察する。なぜ第一大門かというと、最初の大門として道綽の往生思想の概略が示されていると考えられるからである。第一大門も他の大門と同じく様々な項目に言及されているものの、殊にその説かれている順番に意味があると考える。

（一）第一大門で取り上げられている項目

まず第一大門では、どのような内容が取り上げられているのか見ていこう。『安楽集』は大門・節ごとに、説く内容の見出しを冒頭で提示し、その後詳説する形をとる。今回注目する第一大門冒頭の総説で示される内容は以下の通りである。

今先就二第一大門内一、文義雖レ衆、略作二九門一料簡、然後造レ文。①第一明二教興所由一、約レ時被レ機、勧帰二浄土一。②第二拠二諸部大乗一、顕二説聴方軌一。③第三拠二大乗聖教一、明二諸衆生発心久近供仏多小一、欲レ使二時会聴衆力励発心一。④第四弁二諸経宗旨不同一。⑤第五明二諸経得名各異一。如二涅槃般若経等一、就レ法為レ名。自有レ就レ喩、或有レ就レ事、亦有二就レ時就一レ処。此例非レ一。今此観経、就二人法一為レ名。仏是人名、説観無量寿是法名也。⑥第六料二簡説人差別一。諸経起説不レ過二五種一。一者仏自説、二者聖弟子説、三者諸天説、四者神仙説、五者変化説。此観経者、五種説中、世尊自説。⑦第七略明二真応二身一、并弁二真応二土一。⑧第八顕下弥陀浄国位該二上下一凡聖通往上。⑨第九明二弥陀浄国三界摂与不摂一也。

（『浄土真宗聖典全書』〈以下『聖典全書』〉一、五七三―五七四頁）

第一大門では、①教興所由、②説聴方軌、③発心久近、④宗旨不同、⑤得名各異、⑥説人差別、⑦三身三土（真応二身）、⑧凡聖通往、⑨三界摂不の九つの項目を明かすとしている。しかし注意しておきたいのは、「得名各異」と「説人差別」の体裁が他と異なっていることである。見出しの域を超え、ここで既に内容を詳しく論じられているのである。逆にこの二項目は詳説部分では触れられることはなく、二項目を除いた七項目で構成されている。ちなみに他の大門は全て総説と詳説が一致しており、例えば第二大門は

第二大門中、有二三番料簡一。第一明二発菩提心一、第二破異見邪執、第三広施二問答一、釈二去疑情一。

（『聖典全書』一、五八六頁）

と総説で「菩提心義」「破異見邪執」「広施問答」の三項目を掲げ、

就二初発菩提心一、内有二四番一。…

（『聖典全書』一、五八六頁）

第二明二破異見邪執一者、就レ中有二其九番一。…

（『聖典全書』一、五九〇頁）

第三明下広施二問答一、釈二去疑情一上者、自下就二大智度論一、広施二問答一。…

（『聖典全書』一、五九九頁）

と後でそれぞれ詳説を加えている。総説と詳説が一致しないのは第一大門だけなのである。

ではなぜ道綽はこのような順序で記述しているのか。考えられるのは、内容に応じて論じる位置を入れ替えているということである。「得名各異」の内容を見てみると、経典、特に『観無量寿経』の経題について述べていることがわかる。また「説人差別」では経典が誰によって説かれたものかを論じ、『観無量寿経』が仏説であることを明かしている。つまりこの二項目は経典に関する内容を扱っており、大枠で言えば、教法に分類される内容にあたるのである。次に詳説されるのは「教興所由」であり、

第一大門中、明二教興所由一、約レ時被レ機、勧帰二浄土一者、若教赴二時機一、易レ修易レ悟。若機教時乖、難レ修難レ入。…（中略）…計二今時衆生一、即当二仏去世後第四五百年一。正是懺悔修福、応レ称二仏名号一時。若一念称二阿弥陀仏一、即能除二却八十億劫生死之罪一、一念既爾。況修二常念一。即是恒懺悔人也。（『聖典全書』一、五七四―五七五頁）

と末法思想に基づき浄土教の教えを宣揚していく、教法関係の項目であるので、これと併せて教法を説く内容を一番はじめに置こうとしていると考えられるのである。

（二）各項目の内容

次にそれぞれの内容を見ておこう。七項目のうち、「教興所由」は先程教法について述べていることを確認した。二番目の「説聴方軌」であるが、この節は内容に注意しておかなければならない。少し長くなるが、その全文を引用すると、以下の通りである。

第二拠二諸部大乗一、明二説聴方軌一者、於レ中有レ六。(1)第一大集経云、於二説法者一、作二医王想一、作二抜苦想一。所レ説之法、作二甘露想一、作二醍醐想一。其聴法者、作二増長勝解想一、作二愈病想一。若能如レ是説者聴者、皆堪レ紹二隆仏

法、常生二仏前一。(2)第二大智度論云、聴者端視如二渇飲一。一心入二於語議中一、聞レ法踊躍、心悲喜。如レ是之人、応二為説一。(3)第三彼論又云、有二二種人一、得レ福無量無辺。何等為レ二。一者楽二説法一人。二者楽二聴法一人。是故阿難白レ仏言、舎利弗目連、何以所レ得智慧神通、於二聖弟子中一、最為二殊勝一。仏告二阿難一、此之二人、於二因中時一、為二法因縁一、千里不レ難。是故今日、最為二殊勝一。(4)第四無量寿大経云、若人無二善本一、不レ得レ聞二此経一。清浄有レ戒者、乃獲レ聞二正法一。(5)第五云、曾更見二世尊一、則能信二此事一、奉二事億如来一、楽レ聞二如レ是教一。(6)第六無量清浄覚経云、善男子善女人、聞レ説二浄土法門一、心生二悲喜一、身毛為レ竪、如二抜出一者、当レ知、此人過去宿命、已作二仏道一也。若復有レ人、聞レ開二浄土法門一、都不レ生レ信者、当レ知、此人始従二三悪道一来、殃咎未レ尽。為レ此無レ信向一耳。我説、此人未レ可レ得二解脱一也。是故(7)無量寿大経云、驕慢弊懈怠、難二以信一此法一。

（『聖典全書』一、五七五－五七六頁）

これを見ると、「説聴方軌」は(1)『大集経』海慧菩薩品(9)、(2)(3)『大智度論』初品(10)、(4)(5)(7)『無量寿経』往覲偈(11)、(6)『平等覚経』流通分(12)の引用文から成ることがわかる。表題としては「説聴方軌」とあるので、説者と聴者について論じると謳っている。しかし聴者については全ての引用文で言及されるのに対し、説者について触れているのは『大集経』と『大智度論』の引用文のみである。そして実際に何を聞くかと言うと、「其聴法者」（『大集経』）「聞正法」（『無量寿経』）とあるように教法であることがわかる。すなわち「説聴方軌」で中心として扱われているのは、聴者であり聞法なのである。

三番目の「発心久近」は、「発心」と述べるように菩提心について扱うとしているが、まず『涅槃経』如来性品(13)を引用して、

涅槃経云、仏告二迦葉菩薩一、若有二衆生一、於二熙連半恒河沙等諸仏所一、発二菩提心一、然後乃能於二悪世中一、聞二是大

乗経典一、不レ生二誹謗一。若有下於二一恒河沙等仏所一発中菩提心上、然後乃能於二悪世中一、聞レ経不レ起二誹謗一、深生二愛楽一。若有下於二二恒河沙等仏所一発中菩提心上、然後乃能於二悪世中一、不レ謗二是法一、正解信楽、受持読誦。若有下於二三恒河沙等仏所一発中菩提心上、然後乃能於二悪世中一、不レ謗二是法一、書二写経巻一、雖二為レ人説一、未レ解二深義一。

（『聖典全書』一、五七六―五七七頁）

と半恒河沙、一恒河沙、二恒河沙、三恒河沙の諸仏の所で菩提心を発すことについて言及する。続けて

何以故須二如レ此教量一者、為レ彰二今日坐下聞レ経者、曾已発心供二養多仏一也。

（『聖典全書』一、五七七頁）

と述べ、過去の発菩提心により、今の時に経典の教えを聞き信受できていることを示し、菩提心を聞法と深く関係づけて語っている。さらに

又顕二大乗経之威力不可思議一。是故経云、若有二衆生一、聞二是経典一、億百千劫、不レ堕二悪道一。何以故。是妙経典、所二流布一処、当レ知、其地即是金剛。是中諸人、亦如二金剛一。故知、聞レ経生レ信者、皆獲二不可思議利益一也。

（『聖典全書』一、五七七頁）

と再び『涅槃経』如来性品[14]を引用しつつ、経典の教えを聞く者は悪道に落ちることはなく、不可思議の利益を得ることができると結ぶ。すなわち「発心久近」では、菩提心と関連づけて聞法の意義を語り、さらに聞法の利益に言及している。よってここも菩提心が深く関係しているものの、前節と同じく大きくは聞法について述べていると言えるだろう。

続く「宗旨不同」であるが、表題だけでは何を意味しているかわかりづらく、先の「説聴方軌」と同じく、内容を詳しく見ておかなければならない。「宗旨不同」の最初の部分には次のようにある。

第四次弁二諸経宗旨不同一者、若依二涅槃経一、仏性為レ宗。若依二維摩経一、不可思議解脱為レ宗。若依二般若経一、空

慧為レ宗。若依二大集経一、陀羅尼為レ宗。今此観経、以二観仏三昧一為レ宗。若論レ所レ観、不レ過二依正二報一。如下依二諸観一所上弁。（『聖典全書』一、五七七頁）

経典の主題について扱い『涅槃経』や『維摩経』に言及されるが、最終的に「今此観経、以二観仏三昧一為レ宗」とし、『観無量寿経』の観仏三昧を主に取り上げることが示される。次いで『観仏三昧海経』[15]を引用し

若依二観仏三昧経一云、仏告二父王一、諸仏出世、有二三種益一…（中略）…三者令下勧二父王一行中念仏三昧上。父王白レ仏、仏地果徳、真如実相、第一義空。何因不レ遣二弟子行一レ之。仏告二父王一、諸仏果徳、有二無量深妙境界・神通・解脱一。非二是凡夫所一レ行境界一。故勧二父王一、行二念仏三昧一。父王白レ仏、念仏之功、其状云何。…

（『聖典全書』一、五七七―五七八頁）

と浄飯王に仏が観仏三昧（念仏三昧）を勧めていることを明かし、その後浄飯王の問いに答える形で念仏三昧について説明がなされていく。そして『観仏三昧海経』の後には『華厳経』入法界品[16]を引用し、

花厳経云、…（中略）…若人菩提心中、行二念仏三昧一者、一切煩悩、一切諸障、悉皆断滅。

（『聖典全書』一、五七九頁）

彼経（『華厳経』）云、…（中略）…此念仏三昧、即是一切三昧中王故也。（『聖典全書』一、五七九頁）

と念仏三昧により煩悩や障りが断滅されることを示し、念仏三昧こそが三昧の中の王であるとする。

このように「宗旨不同」では経典の主題から出発して、その中でも『観無量寿経』に説かれる念仏三昧を問題とし、『観仏三昧海経』と『華厳経』を用いて説明を加える。よって全体としては念仏三昧という行業について取り扱っている節と言えるのである。

さて「得名各異」と「説人差別」は既に述べたとおり経典に関わる節であった。次の第七の「三身三土」は

問曰、今現在阿弥陀仏是何身、極楽之国是何土。答曰、現在弥陀是報仏、極楽宝荘厳国是報土。然古旧相伝皆云、阿弥陀仏是化身、土亦是化土。此為二大失一也。

（『聖典全書』一、五七九―五八〇頁）

今此無量寿国、即是従レ真垂レ報国也。

（『聖典全書』一、五八三頁）

と阿弥陀仏と西方浄土が、報身であり報土であることを主張する節である。また第八の「凡聖通往」では

今此無量寿国、是其報浄土。由二仏願一、故乃該二通上下一、致レ令二凡夫之善並得二往生一。…（中略）…問曰、弥陀浄国、既云下位該二上下一、無レ問二凡聖一、皆通往上者、未レ知、唯修二無相一得レ生、為当凡夫有相亦得レ生也。答曰、凡夫智浅、多依レ相求、決得二往生一。

（『聖典全書』一、五八三頁）

と阿弥陀仏の浄土には聖者が無相によって往生するだけでなく、凡夫もまた有相によって往生できることを明かす。最後の「三界摂不」では次のようにある。

問曰、安楽国土於二三界中一、何界所摂。答曰、浄土勝妙、体出二世間一。此三界者、乃是生死凡夫之闇宅。雖二復苦楽少殊、修短有レ異、統如観レ之、莫レ非二有漏之長津一。倚伏相乗、循環無際。雑生触受、四倒長溝。且因且果、虚偽相習。深可レ厭也。是故浄土非二三界摂一。

（『聖典全書』一、五八六頁）

浄土が三界に包摂されるか否かを論じ、浄土は世間を超越した勝れた土であり、迷界である三界ではないことを述べている。以上のようにこの第七から第九までは阿弥陀仏と西方浄土がいかなるものか、仏身仏土論を扱っていることがわかる。

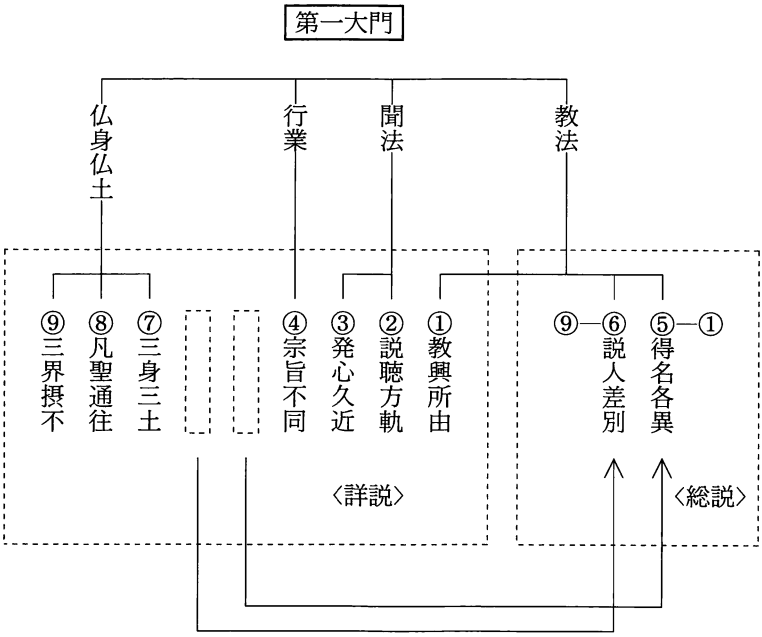
それでは一旦ここまで見てきたことをまとめておこう。第一大門も他の大門と同じく、最初に総説で説く内容を列挙した後、それぞれの項目について詳説していく形をとる。しかし他の大門では全て総説と詳説が完全に一致するのに対し、この第一大門だけは九つ提示される項目のうち、「得名各異」と「説人差別」が総説部分で詳しく述

べられ、詳説部分では取り上げられない。そのため詳説されるという点に注目して追っていくと、第一大門は⑤「得名各異」、⑥「説人差別」、①「教興所由」、②「説聴方軌」、③「発心久近」、④「宗旨不同」、⑦「三身三土」、⑧「凡聖通往」、⑨「三界摂不」の順に論じられていることになる（通し番号は最初の引用文に付したもの）。そして「得名各異」「説人差別」「教興所由」は教法、「説聴方軌」は聞法、「発心久近」も発菩提心と関連する形で聞法、「宗旨不同」は行業、「三身三土」「凡聖通往」「三界摂不」は仏身仏土についての内容とまとめることができ、構成としては次頁の図のようになる。

つまり第一大門は、教法、聞法、行業、仏身仏土の順番で説かれているのである。「得名各異」と「説人差別」が最初の総説に留められ、「教興所由」と併せて教法を最初に説示するように、意図的な並びとなっており、道綽自身は明示しないものの、ここでは道綽の考える往生成仏道の構造が示されていると考えて差し支えないだろう。

ここで一点注意しておきたいのは、聞法・菩提心については過去世におけることと関連して語られているということである。ただし筆者は、過去世において聞法や菩提心を発すことを求めている、重要視しているというよりは、聞法や発菩提心の意義について語ったものと考える。これについて詳しくは次節以降で見ていきたい。

【図】『安楽集』第一大門の構成（通し番号は先に引用文で示した際に付したもの）



二、聞法及び発菩提心の方向性

既に触れたように『安楽集』では一つの大門に複数の内容が説かれるが、反対に一つの内容が複数の大門にわたって説かれることも珍しくない[17]。往生の過程を窺うために第一大門を通して見たが、項目ごとの内容を見るには従来なされてきた方法論に依らなければならない。ここからは個別の内容を大門をまたぎ網羅的に扱うことで、詳しく見ていきたい。

さて前に示した過去世の問題に入る前に、ここで聞法や発菩提心の方向性について押さえておきたい。過去世の問題と関わってくるからである。

（一）聞法

第一大門「説聴方軌」の『大集経』と『大智度論』の引用文を聞法に注目して改めて見てみよう。

第一大集経云、其聴法者、作二増長勝解想一、作二愈病想一。（『聖典全書』一、五七五頁）

第二大智度論云、聴者端視如二渇飲一。一心入二於語議中一、聞レ法踊躍、心悲喜。（『聖典全書』一、五七五-五七六頁）

第三彼論又云、有二二種人一、得レ福無量無辺。何等為レ二。一者楽二説法一人。二者楽二聴法一人。（『聖典全書』一、五七六頁）

法を聞く者は増長勝解や愈病の想いをなすべきである、渇きをうるおすように聞くべきである等、法を聞く際の心構えについて述べられている。あるいは法を聞くことを好む者は、限りない福を得ることができると聞法の利益に

ついて言及している。ここで注意しておきたいのは、この引用文の中では何の法を聞くのかという、具体的な聞法の内容が明かされていないという点である。

これらの引用文以外にも、『安楽集』では浄土教に限定せず、法を聞くことを説いている箇所がいくつか存在する。例えば先に挙げた「発心久近」における『涅槃経』引用文では、悪世中で衆生が大乗経典を聞くことができているのは、過去世で菩提心を発し仏を供養しているからである、と説明していた。また第四大門第二節では、

依二花首経一…（中略）…一相三昧者、有二菩薩一、聞下其世界有二其如来一現在説レ法。菩薩取二是仏相一、以現在レ前。若坐二道場一、若転二法輪一、大衆囲遶。取二如レ是相一。収二摂諸根一、心不二馳散一、専二念一仏一、不レ捨二是縁一。如レ是菩薩、於二如来相一、及世界相一、了二達無相一、常如レ是観、如レ是行、不レ離二是縁一。是時仏像、即現在レ前、而為説レ法。菩薩爾時、深生二恭敬一、聴二受是法一、若深若浅、転加二尊重一。（『聖典全書』一、六一七―六一八頁）

と『華首経』法門品[18]を引用し一相三昧を説明する中で、如来の法を聞くために、心を乱さず仏を専念したところ、ついに仏像が現前しその法を聞くことができたことを示している。ここでも具体的な法の内容は示されていない。『涅槃経』の引用文は現在聞法している状況の説明であり、『華首経』は専念の利益を説くものである。道綽は、聞法にどのような意味があるのか、聞法によってどうなるのかといった問題に踏み込まない場面では、このように浄土の教えに限定せずに聞法を語っているのである。

他方浄土教の聞法を示す箇所も存在し、例としてはまず第二大門第三節が挙げられる。

問曰、大乗経云、業道如レ秤、重処先牽。云何衆生、一形已来、或百年或十年、乃至二今日一、無二悪不レ造。云何臨終遇二善知識一、十念相続、即得二往生一。若爾者、先牽之義、何以取レ信。答曰、汝謂下一形悪業為レ重、以二下品人十念之善一、以為レ軽者、今当二以レ義按一量軽重之義一者。正明下在レ心、在レ縁、在二決定一、不レ在二時節久近多少一

也。云何在心謂、彼人造レ罪時、自依二止虚妄顚倒心一生。此十念者、依二善知識、方便安慰、聞二実相法一生。一実一虚、豈得二相比一也。何者譬如二千歳闇室、光若暫至、即便明朗一。闇豈可レ得レ言二在レ室千歳而不レ去也。

（『聖典全書』一、六〇〇-六〇一頁）

一生涯罪を作り続ける衆生が、なぜ臨終の十念によって往生するかという問いをたてて回答する中で、十念が実相の法を聞くことから生じることを根拠に、臨終の十念で往生できることを説明している場面である。ここに見える善知識から聞く実相の法であるが、「下品人十念」という語が見えることからもわかるように、『観無量寿経』の下品下生における

下品下生者、或有二衆生一、…（中略）…此愚人、臨二命終時一、遇下善知識、種種安慰、為説二妙法一、教令中念仏上

（『聖典全書』一、九七頁）

という善知識の説法を指していることは明かであり、浄土の教えと言えるだろう。その他、第十二大門の『十往生経』[19]の引用文には次のようにある。

若有二善男子善女人一、正二信是経一、愛二楽是経一、勧二導衆生一、説者聴者、悉皆往二生阿弥陀仏国一。

（『聖典全書』一、六四七頁）

経を信じ、衆生に勧めれば、経を説く者も聞く者も、阿弥陀仏の浄土に往生できると説く。『十往生経』は西方浄土に往生する十種の方法を説く経典であり、この聴者は浄土教の法を聞く者である。

以上のように、浄土の教えに限定せず聞法を語る場合と、往生につながるものとして、浄土の教えを聞くことが示されている。「説聴方軌」の構成を見ると、前半の『大集経』『大智度論』引用文で聞法の心構えや利益が説かれるものの具体的な法には言及がなかったのに対し、後半『無量寿経』『平等覚経』の引用文では「此経」「此教」

「浄土法門」「此法」と聞く内容に言及がなされ、対象が浄土の教えであることが示されている。また「教興所由」では「約時被機」を掲げ、時機相応の教えとして浄土の教えを勧めている。これらを総合すると、『安楽集』では『涅槃経』の引文のように大乗仏教の法を聞くことを述べている箇所も確かにある。しかしながら具体的に聞く内容に関しては浄土の教えを示し、後者を勧めていると言えるだろう。

（二）発菩提心

次に聞法と関連づけて論じられていた発菩提心について確認しておこう。発菩提心も一般的な理解としての菩提心と、浄土教における菩提心としての二つの用例が確認できる。浄土の教えに限定しないものとしては、第一大門「発心久近」で引かれた『涅槃経』の文に見える菩提心や、第五大門第一節の次の文が挙げられる。

一明二延促一者、但一切衆生、莫レ不二厭レ苦求レ楽、畏レ縛求レ解。皆欲二早証二無上菩提一者、先須下発二菩提心一為上首。此心難レ識難レ起、縦令発二得此心一、依レ経終須下修二十種行一、謂二信・進・念・戒・定・恵・捨・護法・発願・廻向一、進詣菩提上。然修道之身、相続不レ絶、逕二一万劫一、始証二不退位一。当今凡夫、現名二信想軽毛一、亦曰二仮名一、亦名二不定聚一、亦名二外凡夫一、未レ出二火宅一。（『聖典全書』一、六二五頁）

ここでは無上菩提を求めるためには、まず菩提心を発し、十種の行を修めなければならないとするが、菩提心を発してからの過程は一万劫という長い時間を要し、凡夫には修道を相続させることが難しいとする。その後

何以得レ知。拠二菩薩瓔珞経一、具弁二入道行位一、法爾故、名二難行道一。又但以一劫之中、受身生死、尚不レ可二数知一。況一万劫中、徒受二痛焼一。若能明信二仏経一、願レ生二浄土一、随二寿長短一、一形即至位階二不退一。与二此修道一万劫一斉レ功。諸仏子等、何不二思量一、不二捨レ難求レ易也。（『聖典全書』一、六二五頁）

と示し、その相続することが難しい道は難行道であると述べる。それに対し浄土を願生する道は寿命が尽きた後に不退の位に至ることができる易行道であり、なぜ難行道を捨て易行道を求めないのかと説く。ここでの菩提心は難行道を説明される中で扱われており、易行道である浄土の教えとは区別されていることがわかる。

なお、第二大門第一節の菩提心を解説する箇所では

第一出二菩提心功用一者、大経云、凡欲レ往二生浄土一、要須下発二菩提心一為ヒ源。（『聖典全書』一、五八七頁）

と往生浄土には発菩提心が必要と明かし、続けて

第二出二菩提名体一者、然菩提有二三種一。一者法身菩提。二者報身菩提。三者化身菩提也。…（中略）…第三顕二発心有ヒ異者、今謂、行者修レ因発レ心、具二其三種一。一者要須レ識二達有無従レ本已来、自性清浄一。二者縁二修万行一。八万四千、諸波羅蜜門等。三者大慈悲為レ本、恒擬二運度一為レ懐。此之三因、能与二大菩提一相応。故名二発菩提心一。又拠二浄土論一云、今言二発菩提心一者、正是願作仏心。願作仏心者、即是度衆生心。度衆生心者、即摂二取衆生一、生二有仏国土一心。今既願レ生二浄土一。故先須レ発二菩提心一也。（『聖典全書』一、五八七―五八八頁）

と三身の菩提とそれを求める菩提心について述べた後、『往生論註』善巧摂化章[20]の文を用いて浄土教の菩提心について解説している。ここから先行研究では、道綽は一般的な菩提心理解を示しつつも、浄土教の菩提心を提示し、願生心を菩提心としていると評価する[21]。確かに『安楽集』ではこの他にも、第七大門第二節の

若欲二発レ心帰ヒ西者、単用二少時礼観念等一、随二寿長短一、臨二命終時一、光台迎接、迅至二彼方一、位階二不退一。（『聖典全書』一、六三四―六三五頁）

と願生心と取れる箇所や、第十二大門の『安楽集』をむすぶにあたって述べられている、

撰集流通徳、普施二於一切一、先発二菩提心一、同帰二向浄国一、皆共成二仏道一。（『聖典全書』一、六四八頁）

という浄土の菩提心を発すことを勧める偈文のように、菩提心の中でも浄土の菩提心を発すよう求めている場面が散見される。よって菩提心に関して道綽は、菩提心を願生心として用いることもあれば、他の項目の説明として聖道門の菩提心を使うこともある。ただし発すべき内容としては浄土門としての菩提心を説いていることが窺えるのである。

以上聞法と発菩提心について浄土の教えか否かという視点で見てきたが、総じて道綽には聞法・菩提心ともに、浄土の教えに限定せずに説く場合と、限定して言及する場合の両方が確認できた。しかしいずれも勧める内容としては浄土の教えを聞くことと、浄土の菩提心を発すことを示している。つまり道綽の聞法・発菩提心理解には一般仏教のことを明かしつつ、浄土教に収斂させていく方向性をもっていると言えるのである。この点を踏まえて過去世の問題を論じたい。

三、過去世の問題

さて第一節で問題として取り上げたように、菩提心については、現世だけでなく過去世についての言及も存在する。また菩提心の他、菩提心と関係深く語られていた聞法や、聞法に付随する値仏についても過去世において語られる箇所が存在する。これらはいかなる意図で語られているのだろうか。以下詳しく見ていきたい。

（一）過去世における発菩提心・聞法・値仏

菩提心については第一大門の「発心久近」の他にも、別時意説に対応する中で、「発心久近」で引いた箇所と同

じ『涅槃経』の文を用い、過去世における菩提心を提示している。

如二涅槃経云一。若人過去已曾、供二養半恒河沙諸仏一、復経発心、而能於二悪世中一、聞レ説二大乗経教一、但能不レ謗、未レ有二余功一。若経供二養一恒河沙諸仏一、及経発心、然後聞二大乗経教一、非二直不レ謗、復加二愛楽一。

（『聖典全書』一、五九八頁）

また聞法と値仏についても、前節でみた「説聴方軌」における、

第五云、曾更見二世尊一、則能信二此事一、奉二事億如来一、楽レ聞二如レ是教一。

（『聖典全書』一、五七六頁）

という、かつて世尊に見え、億という如来に事えたという過去世における値仏の記述の他、第三大門第三節で

如二法花経云一。過去不可説久遠大劫、有レ仏出レ世、号二大通智勝如来一。有二十六王子一、各昇二法座一、教二化衆生一。一一王子、各各教二化六百万億那由他恒河沙衆生一。其仏滅度已来、至極久遠。猶レ不レ可二数知一。何者経云、総取二三千大千世界大地一、磨以為レ墨。仏言是人、過二千国土一、乃下二一点一。大如二微塵一。如レ是展転、尽二地種墨一。仏言、是人所レ経、国土若点不点、尽末為レ塵、一塵一劫、彼仏滅度已来、復過二是数一。今日衆生、乃是彼時、十六王子座下、曾受二教法一。

（『聖典全書』一、六一一頁）

と『法華経』薬草喩品[22]の引用文を交えつつ、輪廻中において釈尊の教えに出会うことができるのは、過去世で法に出会っているからであると説く場面が存在する。

このように道綽は過去における発菩提心や聞法・値仏、いわば衆生における過去の宿善について言及している。ただし注意しておきたいのは、過去世におけるこれらの対象について、浄土を願うものとしての菩提心や阿弥陀仏の法の聴聞、阿弥陀仏への値遇とはしないということである。前節で確認したように、道綽は菩提心や聞法に関して、浄土の教えに限定せずに言及しつつ、浄土教の教えに収斂させていく。この点を念頭におきながら次項で道綽

の人間観との関係から見ておこう。

（二）宿善と輪廻無窮の凡夫

ところで道綽は宿善の重要性を認めるものの、基本的には、今世の衆生は凡夫であり、罪悪性をもつ輪廻し続ける存在と見る。例えば第三大門第一節では

余既自居二火界一、実想懐レ怖。仰惟、大聖三車招慰、且羊鹿之運、権息未レ達。仏訶二邪執障一、上求菩提一。縦後廻向、仍名二迂廻一。若径挙二大車一、亦是一途。只恐現居二退位一、嶮径遙長。自徳未レ立、難レ可二昇進一。

（『聖典全書』一、六〇七頁）

と道綽自ら迷いの世界に居り、しかもこの世界を抜け出す行程は遙か長延なもので、進むこともままならないと述べている。また第三大門第三節の総説では

第三明下従二無始世劫一已来、処二此三界五道一、乗二善悪二業一、受二苦楽両報一、輪廻無窮、受レ生無数上。

（『聖典全書』一、六〇七頁）

と衆生は輪廻し続け、しかも三悪道の中に身を置くことが多いことについて論ずると掲げており、この節で人間観について集中的に取り上げている。ここでは五つの項に分けて論じているが、その第一項で六道中の輪廻について詳しく説明し、衆生が輪廻を続けるのは無始以来のことだとする。しかも第二項では

第二問曰、雖レ云二無始劫来六道輪廻無際一、而未レ知、一劫之中、受二幾身数一、而言二流転一。答曰、如二涅槃経説一。…（中略）…或云、一劫之中、所レ積身骨、如二毘富羅山一。

（『聖典全書』一、六一〇頁）

と輪廻すると言っても一劫中にどれだけ身を受けるかと問い、『涅槃経』光明遍照高貴徳王菩薩品[23]を引用しその数

が数え切れない程だと述べる。第三項で輪廻無窮の経証として『法華経』と『涅槃経』を示した後、第四項では

第四問曰、此等衆生、既云二流転多劫一。然三界之中、何趣受レ身為レ多。答曰、雖レ言二流転一、然於二三悪道中一、受レ身偏多。…（中略）…経（『五苦章句経』）云、衆生等是流転、恒三悪道為二常家一、人天暫来即去。名為二客舎一故也。

（『聖典全書』一、六一一―六一二頁）

と無数に生を受ける中でもどの境界に生まれるのかと問いをたて、三悪道に身を置くことが多く、『五苦章句経』[24]を用いて人天に生まれてもすぐに去ってしまうとする。

またこの項では

故知、悪道身多。何故如レ此。但悪法易レ起、善心難レ生故也。

（『聖典全書』一、六一一―六一二頁）

と衆生が三悪道に身を置くことが多い理由に、悪を作しやすいことをあげている。このような表現は第三大門以外にも、第二大門第三節の

但一切衆生、従二曠大劫一来、備造二有漏之業一、繋二属三界一。

（『聖典全書』一、五九九頁）

衆生一形已来、或百年或十年、乃至今日、無二悪不レ造。

（『聖典全書』一、六〇〇頁）

というものや、第十二大門の『十往生経』[25]引用文の

阿難復白レ仏言、世尊、世間衆生、若有二如レ是正念解脱一、応レ無二一切地獄・餓鬼・畜生三悪道一也。仏告二阿難一、世間衆生、不レ得二解脱一。何以故。一切衆生、皆由二多レ虚少レ実、無二一正念一。以二是因縁一、地獄者多、解脱者少。譬如下有レ人、於二自父母及以師僧一、外現二孝順一、内懐中不孝上、外現二精進一、内懐二不実一。如レ是悪人報雖レ未レ至、三塗不レ遠、無レ有二正念一、不レ得二解脱一。

（『聖典全書』一、六四五頁）

における、一切衆生は外面を取り繕うも、内面に不実を抱く存在とする説示に示されており、衆生を悪を作り続け

る存在とする認識が窺える。

このように宿善と凡夫性、道綽の人間観においては二つの方向性が見られ、これをどう評価するか、先行研究で議論が分かれている。まず批判的な評価として、輪廻する凡夫でありながら、宿善をもつという矛盾した人間観をもつ[26]、とするものや、宿善を認めている点で、善導に比べ楽観的な人間観である[27]というものがある。一方肯定的な評価として、人間は輪廻無窮の中にいる造悪的存在としつつも善業を認めるが、こうして善と悪を説示するのは向上的方向性をとる教法を根拠とした表現である[28]とするものや、道綽の想定する凡夫は新発意菩薩であり、輪廻無窮と表される衆生は発心以前の者を指し、宿善は発心した新発意菩薩として仏道を歩ませる契機として矛盾無く示される[29]、と見るものがある。つまり道綽の凡夫でありながら宿善は存在するという人間観には、①矛盾している、善導に比して不徹底であるという批判的な評価と、②両面性があるものの、論理的に成立するもので矛盾ではないという肯定的な評価が存在するのである。

ではその上で、この問題をどう考えるかということであるが、先に筆者の見解を示しておくと、後者の見方が妥当と考える。なぜなら、この問題を扱うにあたっては、第三大門第三節第五項の問答である以下の文が重要だと思われるからである。

問曰、一切衆生、皆有二仏性一、遠劫以来、応レ値二多仏一。何因至レ今、仍自輪二廻生死一、不レ出二火宅一。答曰、依二大乗聖教一、良由レ不下得二二種勝法一以排中生死上。是以不レ出二火宅一。何者為レ二。一謂聖道。二謂往生浄土。其聖道一種、今時難レ証。一由下去二大聖一遙遠上。二由二理深解微一。…（中略）…当今末法、現是五濁悪世。唯有二浄土一門一、可二通入一路。

（『聖典全書』一、六一二頁）

ここで道綽は、人間を仏性があり多仏に見えるという宿善を有しながら、輪廻する存在であると認識している。す

なわち過去世の行為による宿善を持ちながら、今世では迷いの世界に生まれ、それどころか造悪的な存在となっている。その人間がいかにして救われるかということが道綽教学の主題なのである。よって善悪両面を持つという人間観は、道綽の思想上に矛盾をきたした結果見えてくるものとして評価すべきではなく、むしろ人間を直視した結果道綽が解決しようとした課題として見るべきなのである。

また先に過去における値仏や聞法は、阿弥陀仏や阿弥陀仏の法に対してではないことを指摘した。これはたとえ過去世で多仏に見えようと、浄土の教えに出会わなければ往生成仏できないことを示している。だからこそ引用文の答えの部分では聖道門と浄土門を二種の勝法として提示した後、「唯有二浄土一門一可二通入一路」と浄土の教えのみが救われる道だと述べているのである。

ここまでで、道綽における過去世の発菩提心や値仏・聞法に対する見方が明らかになったであろう。確かに道綽は過去世における発菩提心や値仏・聞法にも言及している。しかしそれらが浄土の教えを対象としたものとされることは決してない。却ってそのような宿善を有していようとも、浄土の教えに出会いそれに依らなければ、往生成仏できないという、厳しい現実をつきつけるものとして示されているのである。第一大門で過去世における菩提心とそれに基づく聞法を示しているといっても、これが過去世の聞法や菩提心を発すことを求めている、重要視していることにならないと考えられるのは、以上のことが理由だからである。

結　語

本論では「勧信求往」の構造の一視座として、『安楽集』に見える往生の過程を検討し、そこで浮かび上がってくる問題点を考察してきた。改めて述べてきたことをまとめると、以下の通りである。

①『安楽集』第一大門では九つの項目が論じられているが、詳説されている順番とその内容を考えると、教法、聞法、行業（念仏）、仏身仏土という構成になっている。明示しないものの、ここでは道綽考える往生過程が示されている。ただし聞法・発菩提心については過去世と関連づけて語っており、この点には注意が必要である。

②道綽は聞法・発菩提心といった内容について、浄土の教えに限定せずに語っている。その中で勧めるものとしては、阿弥陀仏への聞法や浄土への願生心としての発菩提心が中心であり、浄土の教えに収斂させていく方向性が見受けられる。

③過去世における発菩提心・値仏・聞法は、浄土の教えとしては語られない。これらは凡夫性と宿善という人間観とも関わるが、過去世における聞法等の宿善の説示は、善性を持ちながらも、浄土の教えに出会わなければ往生成仏できないという、衆生に対し非常に厳しい往生の構造を示すことになる。よって第一大門に見られる過去世への言及も、浄土の教えでなければ救われないことを示す延長上にあると考えなければならない。

以上往生の過程を窺うことで道綽教学を体系的に見ることを試みたが、第一大門の構成から往生の過程が明かされていることは、非常に大きな意味を持つ。構成が複雑で未整理とも評され難読の書物とされる『安楽集』ではあるが、往生過程を示すという意図をもって、論理立った記述をしている部分も窺える。この点は評価を改めなければならないだろう。

また『往生論註』の「於二此間仮名人中一、修二諸行門一、前念与二後念一作レ因」（『聖典全書』一、四五四頁）とあるものを、「於二此間仮名人中一、修二五念門一、前念与二後念一作レ因」（『聖典全書』一、六〇五頁）と敢えて「五念門」という語を使わずに引用する等、道綽は曇鸞の示した五念門を、そのままの形では受容しないことが指摘されている。(30) 第一大門で明かされる教法、聞法、念仏、仏身仏土という過程は、道綽独自の往生体系を示しているものと見

るべきではないだろうか。

註

（1）拙稿「『安楽集』の「勧信求往」について」（『印度学仏教学研究』六五―一、二〇一六年）参照。

（2）内藤知康『安楽集講読』（永田文昌堂、一九九九年）九―一三頁参照。

（3）山本仏骨『道綽教學の研究』（永田文昌堂、一九五九年）三七六―四〇八頁、岡亮二「中国三祖の十念思想（二）―道綽の十念思想―」（『龍谷大学論集』四五〇、一九九七年）、木村迎世「『安楽集』における念仏三昧―仏の三種利益を中心に―」（『佛教論叢』四二、一九九八年）、藤丸智雄「『安楽集』と『観仏三昧海経』」（木村清孝博士還暦記念論集『東アジア仏教―その成立と展開』、春秋社、二〇〇二年）等が挙げられる。

（4）佐藤健「道綽禅師の浄土観―時機相応の浄土―」（『仏教文化研究』二二、一九七六年）、渡邊了生「『安楽集』における「三身三土義」解釈の再考」（『渡邊隆生教授還暦記念論集　佛教思想文化史論叢』永田文昌堂、一九九七年）、久米原恒久「道綽における仏身仏土論への一視点」（『大正大学総合仏教研究所年報』二四、二〇〇二年）、那須公昭「道綽禅師の西方浄土思想―方処の問題をめぐって―」（『宗学院論集』八四、二〇一二年）等が挙げられる。

（5）わずかに山本仏骨氏が『安楽集』第一大門について前半を往因、後半を往生する仏土を説いていると指摘しているが、提示にとどまり詳説はしていない（山本仏骨『道綽教学の研究』二一六頁参照）。本研究はこの山本説の示唆も念頭に置き、第一大門の構造から往生の過程を考える。

（6）例えば第二大門では菩提心について述べた後、問答形式で念仏や仏身仏土等多岐にわたる項目を扱い、第三大門では教法、時間、人間等について論じられている。

（7）杉山裕俊氏の研究はこの方法がとられ、難易二道、念仏三昧、仏身仏土等を中心に、項目ごとに各大門を網羅的に取り上げている。（杉山裕俊「『安楽集』の研究」平成二六年度大正大学提出学位請求論文、二〇一四年参照）。

（8）引用する漢文は『聖典全書』のものを用い、新字に改めた上で筆者が返り点を施した。

（9）『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』）一三、七三頁、下（内藤知康『安楽集講読』一七二頁参照）。ただし取意引用であり、引用元の本文そのままではない。

(10) (2)は『大正蔵』二五、六三頁、中、(3)は『大正蔵』二五、二六七、上-中（内藤知康『安楽集講読』一七二-一七三頁参照）、どちらも取意引用。

(11) いずれも『聖典全書』一、四六頁（内藤知康『安楽集講読』一七四-一七五頁参照）、(5)のみ取意引用。

(12) 『聖典全書』一、二八七-二八八頁（内藤知康『安楽集講読』一七五頁参照）、取意引用。

(13) 『大正蔵』一二、三九八頁、下（内藤知康『安楽集講読』一七六頁参照）、取意引用。

(14) 『大正蔵』一二、三九八頁、上-中（内藤知康『安楽集講読』一七七頁参照）、取意引用。

(15) 観地品（『大正蔵』一五、六四七頁、中）、本行品（『大正蔵』一五、六八七頁、中）、六譬品（『大正蔵』一五、六四六、上）をつなげて引用（内藤知康『安楽集講読』一七八-一七九頁参照）、取意引用。

(16) 『大正蔵』九、七七八頁、下、及び『大正蔵』九、七七七頁、中（内藤知康『安楽集講読』一七九-一八〇頁参照）、どちらも取意引用。

(17) 例えば念仏は第一大門から第五大門までで取り上げられ、仏土論は第一大門、第二大門の他、第六大門でも取り上げられている。

(18) 『大正蔵』一六、二〇三頁、下（内藤知康『安楽集講読』二四六頁参照）、取意引用。

(19) 『大日本続蔵経』一、三六五、中、（内藤知康『安楽集講読』三〇二頁参照）、取意引用。

(20) 『聖典全書』一、五一九頁（内藤知康『安楽集講読』一九八頁参照）、取意引用。

(21) 小林尚英「中国浄土教祖師の菩提心について」（『藤吉慈海喜寿記念　仏教学・浄土学論集』文化書院、一九九二年）参照。

(22) 『大正蔵』九、二六頁、下・二二頁、上・二五頁、下をつなげて引用（内藤知康『安楽集講読』二三四-二三五頁参照）、取意引用。

(23) 『大正蔵』一二、四九六頁、中（内藤知康『安楽集講読』二三四頁参照）、取意引用。

(24) 『大正蔵』一七、五四四頁、中（内藤知康『安楽集講読』二三八頁参照）、取意引用。

(25) 『大日本続蔵経』一、三六五、中、（内藤知康『安楽集講読』三〇二頁参照）、取意引用。

(26) 稲岡了順「道綽・善導の宿善観について」（『大正大学綜合仏教研究所年報』一、一九七九年）参照。

(27) 羽田信生「道綽・善導二師の観経下品観比較」(『親鸞教学』三七、一九八〇年)参照。
(28) 矢田了章「道綽における人間観の展開」(『龍谷大学論集』四七二、二〇〇八年)参照。
(29) 杉山裕俊「『安楽集』の研究」三八-四七頁参照。
(30) 山本仏骨「安楽集と五念門に就て」(『宗学院論輯』三三、一九四一年)、宮井里佳「曇鸞から道綽へ―五念門と十念―」(『日本仏教学会年報』五七、一九九一年)、マイケル・コンウェイ「『安楽集』における曇鸞教学の受容と展開―行と信の展開を中心に―」(『真宗教学研究』二九、二〇〇八年)、杉山裕俊「『安楽集』の研究」七〇-九一頁参照。